

JN協会特別顧問(空港施設㈱代表取締役社長) 丸山 博

あけましておめでとうございます。昨年のご挨拶では、一昨年の訪日外客数が、1300万人を超え、一年で30%伸びたということをご報告しました。昨年の訪日外客数は、1900万人を超え、増加数は、600万人超ということになります。この増加数は、10年前の訪日外客数と同じです。2020年に2000万人という目標を前倒して達成することは、ほぼ間違いありません。ほとんどの訪日客は、航空機を利用し、そのうちの半数は、首都圏の羽田と成田の両空港から出入りします。羽田で仕事をしている私には、訪日客の爆発的な伸びを身をもって感じる事ができ嬉しい限りです。日本再興戦略改訂2015では、訪日需要の急速な増加に先手を打って、首都圏空港の機能強化など「攻め」の受け入れ機能の整備を図ることとされています。'おもてなし'体制の整備が喫緊の課題ということですので、通常おもてなしは、空港から始まりますが、日本の航空機を利用されるお客様にとっては、搭乗された時点がおもてなしの始まりです。幸い日本の航空会社、空港は、おもてなしに関しては、国際的に高い評価を受けています。私の勤務している会社は、空港に必要な機能と施設を提供することにより航空の発展に貢献することを使命としています。訪日外客2000万人時代を迎え、私どもは、微力ながら、縁の下の力持ちとして、航空の発展、ひいては、訪日外客のおもてなしに貢献できればと願っています。

■■■■■■■■■■ JN協会副理事長(東海旅客鉄道㈱相談役) 須田 寛

謹賀新年  
年頭にあたり皆様のご健勝、益々のご発展をお祈り申し上げます。  
昨年は外国人観光客の来日が激増し2020年2000万人の目標値をうかがう勢いとなり、各観光地でも外国語の会話が日常的に聞かれるようになりました。今年こそこの日本の国際観光を持続発展させたいと思います。同時に今年以降日本の観光客の伸びは低迷しています。内国人・外国人の観光を車の両輪として発展させてこそ真の観光立国が実現すると思います。  
さらに最近の観光客の動向は特定地域(首都圏近畿圏等)への集中が目立ちます。昨年は北陸新幹線開業で北陸方面への観光客も増加しましたが、その他の地域は観光客の数や消費額が伸び悩んでいます。両地域だけでなく国内の観光地(新開発のものも含み)に万遍なく幅広く観光客を迎えるようにする必要があります。国も支援しようとしている広域モデルコースの発信や受入体制の整備が急務であります。このようなバランスのとれた観光を実現して真の観光立国実現をめざして頑張っていきたいと思っております。皆様方のご指導ご支援をお願い申し上げます。

JN協会特別顧問(初代観光庁長官) 本保 芳明

2015年のハウステンボスの経常利益は、100億円を突破した。売上高37倍のJTBグループの2014年度の経常利益が186億円だから、大したものである。1992年の開業以来18年間赤字を垂れ流していた企業とは信じられない快挙である。この快挙は、何と云っても、H.I.S.澤田氏が社長就任後次々と投入し続けている100万本のバラ、変なホテルなどの新規サービスの賜物であり、これらのサービスを生み出す氏のサービス・イノベーションの成果だと思っている。昨年、全般的には活発だったとは言えない国内観光で、強力な集客効果を発揮し、注目を集めた北陸新幹線とUSJについても、イノベーションの成果ということができると思っている。前者は、交通サービスのイノベーションであり、後者は、ハリポッター導入というアトラクションのイノベーションである。お客様は、ありきたりではなく、イノベティブなサービスがあれば反応するというのが良く分かる。国内観光の不振が言われて久しく、日本人は旅をしなくなったという声も聞くが、観光サービスがマンネリ化して魅力が失ったことが最大の原因と考えている。外国人という全く新しい客層に刺激されて、広くイノベーションが起こることを願っている。

■■■■■■■■■■ JN協会副理事長(元日本航空副社長) 横山 善太

新年、明けましておめでとうございます。  
昨年は今まで考えられなかった大きな組織、会社で不祥事が続きました。東芝、フォルクスワーゲン社等、昨年に限らず最近の傾向でもあるのでしょうか。私の考えでは心配していた状況であったので起こり得ることだと思っていました。  
年始、年末、始まりと終り必ず話題の中心は株式市場です。ニュース報道のトップが世界でも日本でも「株式市場の動向」が中心の時代は、それまでの時代に比べ異常と思えてなりません。中国は共産党政権ですが、その国家資本主義と思える進展に解説は殆どありません。一方、コーポレートガバナンス、情報開示・保護、コンプライアンス等経営手法の充実徹底はただただ機械的、形式的に導入、経営に携わる経営者は充分フォロー出来なかったのではないのでしょうか。大きな組織での最重要課題は、トップの独裁を許さず、またその動向を民主的に捌ける仕組みを規定できるかどうかであると思うのです。小生自身、政府によるトップ人事の介入を受けたり、また社内出身者のトップが独裁者と成ったり等の経験から得た理解であります。  
歴史は文明の進歩と人間の対応の調和が、まさに糾える蠅の如くであったのではないのでしょうか。だからこそ、その調和が疑わしいとチャップリンの皮肉になるのでしょうか。つまり自由と平等、この相矛盾する概念を同時に達成するにはどうすれば良いか。年頭に当たり、ノーベル賞に「哲学」が必要でないかと思うのであります。

新しいまちづくり「都市観光」⑤

JR東海相談役 須田 寛

「都市観光」とは、都市(まち)そのものもつ特色、そこに集積された独自の文化、景観とくらしのいとなみにふれるとともに観光客と市民との交流を通じてまちづくりの原点、都市の文化にふれる観光をいう。

「都市観光の観光資源」

「都市観光」は、都市内に存在する多くの観光資源とそれらをあわせた都市の全体像、即ち都市そのものもつ「光」(魅力、美しさ、特色)に触れることから構成されている。従ってその資源は多くの資源とその集積を含む。まず都市観光資源を味わう視点(行動)から分類すると次の通りである。

- ・「見る」—都市の景観、まちなみ等都市の風物
- ・「買う」—その都市の特産品(名物など)等
- ・「学ぶ」—都市の歴史機能等を現存する史蹟や遺蹟等を通じて見学(学習)
- ・「味わう」—都市のもつ雰囲気(市風)、人々のくらし、いとなみへの接触
- ・「食べる」—その都市独特の「食」文化にふれる
- ・「乗る」—都市の様々な交通機関(地下鉄、バス、モノレール、路面電車等)を利用すること、それ自体
- ・「集う」—観光客と市民とのふれあい機会の設定(ふれあいの場等)

このような行動のうちとくに「集う」ということが「都市観光」の大きい要素であり目的といえよう。これによって「都市観光」はひとつの文化行動に高まる。この「機会」や「場」を市民と観光客が協働して各都市につくり出していくことが期待される。

次に「都市観光」を構成する様々な観光資源を他の観光と同じように有形、無形、総合、各資源分類に当嵌めて整理してみる。都市観光の場合とくに重要なものは総合観光資源(複数の観光資源のまとまり)である。即ち前述のように市民と観光客のふれあいの機会や場はこのような都市独特の観光資源によってつくられることが多いからである。このような点からみて都市観光の場合個々の観光資源にふれる(訪れる)場合もたえず、その資源と都市の全体像との関係を念頭に観光することが必要である。このような観光を通じて「都市観光」ならではの大きい観光効果を得ることが出来ると考えられるからである。

都市観光資源の体系(例)

	有形観光資源	無形観光資源	総合観光資源
テーマ別観光資源(例)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まちなみ(建造物群)</li> <li>・社寺、城址</li> <li>・自然(花、樹木、川、池、湖沼、海岸)</li> <li>・運河、産業文化遺産</li> <li>・工場、工房、商店街</li> <li>・交通施設(道、橋、駅)</li> <li>・まつり、伝統行事</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気象(雪、月、雨)</li> <li>・音</li> <li>・伝統行事</li> <li>・伝統技術(匠の技等)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・博物館、美術館、動物園、植物園、文化施設、公園、テーマパーク(アミューズメント施設)</li> </ul>
都市観光			(複合観光資源) 都心、副都心、都市型リゾート

COLUMN ガス灯とメルヘンの世界

「百塔の街と呼ばれるチェコの首都・プラハには、何度訪れてもクラシックな郷愁を呼び覚まされる街の風情と情緒が漂っている。市内中心部をスヌタナがこよなく愛した「ヴルタヴァ(ドイツ語名モルダウ)川が、南北にゆったりと流れている。とりわけそのヴルタヴァ川に架かるカレル橋から眺めるプラハ城の優雅な姿は、プラハを訪れた人をして、また訪れたい気持ちで魅了してしまうのである。  
市街にはどこことなく垢抜けていて、心が洗われるような奥深い趣があり、古い伝統を窺わせ、その佇まいに底知れない魅力が秘めている重厚な都市プラハには、冬になると思いがけず忽然と現れるメルヘンの世界に思わず立ち戻らせることがある。雪がちらつく中を人影もまばらな道端を寒さから身を守るようにマントを抱え込んだ少女が、ひとり小走りに立ち去る影にハッとさせられる。ひよっとすると、これはアンデルセンが描いた「マッチ売りの少女」のファンタジーではないだろうか……。旧市街では、昔の庶民生活の面影を今に伝える、メルヘン

の世界へ誘ってくれる幻想的ないとなみに行き合うこともある。プラハ城広場の周辺には夕暮れ時になると、先端に火種をくんだ古典的なステッキを持ち魔術師のような素振りや、街灯にひとつひとつ小さな明かりを灯しながら歩いて巡る男の姿を見かけるのである。その仄かな情景には、人類が発明した文明の利器を、頑なに伝統的な仕草で昔ながらの作法を継承しているんだとアピールする気概のようなものを感じ取ることが出来る。  
18世紀末イギリスに生まれ、明治の初めに日本各地にも普及しながらも、今では小樽運河や、横浜馬車道などごく限られた場所や、NHK朝の連続ドラマ「あさが来た」でしか見られなくなった近代文明の遺産「ガス灯」が、ここプラハでは長い間実用に供され、それが近年になって街の観光に魅力的なアクセントをつけて観光客の興味と関心と呼んでいるのである。  
寒い外気の中でいかめしい男が、何かつぶやきながら隣りのガス灯へ立ち去る後ろ姿を少し離れて見ていると、ジーンと胸に熱いものがこみ上げてくる。異国で感じる明治の残照でもあろうか。

エッセイスト 近藤 節夫